

響音

ひびき

第72号 (通刊95号)

平成27年1月発行

「響」とは「郷」の「音」と書きます。
私ども東京福祉会では、この温かなものを
大切に「心に響く葬儀」を目指しております。



東京福祉会だより

今号のエッセイ

『超高齢社会に生きる大人の作法』

《アクティブ・エンディングコンサルタント》金子 稚子氏

新年のご挨拶 理事長 原山 陽一
お客様アンケート結果報告
平成26年度 物故者慰霊法要 報告と御礼
ホームページリニューアルのお知らせ
エッセイ集完成のお知らせ

「東京福祉会だより（響）」は、個人会友、
団体会友の皆様をはじめ都内の各福祉事
務所・施設などに、配布しております。

大正8年創立



社会福祉法人 **東京福祉会**

新年のご挨拶

社会福祉法人東京福祉会
理事長 原山 陽一



新年明けましておめでとうございます。心から新春のお慶びを申し上げます。

さて、社会福祉法人東京福祉会は平成26年11月6日をもちまして創立から95周年を迎えることが出来ました。これもひとえに皆様方の温かいご支援とご指導の賜物と、心より厚く感謝申し上げます。

当会は、大正8年に財団法人助葬会として発足し、生活困窮者のための葬儀を行う全国でも数少ない社会福祉法人として社会福祉と地域貢献に邁進してまいりました。

また平成26年には、皆様により一層納得し満足して頂き、来るべき100周年に向け経営基盤を強化するために、「経営戦略5か年計画」を策定いたしました。

葬祭部門では、「真心」「安心」「向上心」の“3つの心”を胸に、サービスとクオリティの一層の向上を、高齢福祉部門においては、地域の中核施設として地域包括ケアシステムの一翼を担うサービスの充実を、それぞれ目指してまいります。

わが国では、今後75歳以上の後期高齢者が、特に大都市部において急増すると予測されており、高齢期の生活を支える当会の役割は益々重要になると考えられます。

来るべき100周年に向けて役職員一同さらなる成長をすべく事業の強化に取り組み、社会福祉法人としての使命と社会的責任を果たすよう全力をつくす所存です。

平成27年は未年です。羊は家族の安泰や平和をもたらす縁起の良い動物とされております。

本年の東京福祉会は、当会を利用される皆様に安心や必要な情報、質の高いサービスを提供し、地域や家族の皆様にも心の安泰をもたらす法人になる一年にしたいと思います。

皆様方におかれましては今後とも変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますよう、宜しく願い申し上げます。



超高齢社会に生きる大人の作法

金子 稚子

2012年10月2日に、流通

ジャーナリストであった夫を亡くした。享年41。病名が確定した時にはすでに余命0日だったが、その後1年半ほど闘病し、自宅で見送った。

TVなどで元気な姿を見せていた人間が突然亡くなったこともあっただろうが、生前に葬儀や墓の準備、さらに会葬礼状まで自分で書いていたことなどが大きく報道され、その年の流行語大賞でトップテンに選ばれた「終活」に、代表として受賞の榮譽にあずかった。

しかし私は、夫がしたことは、世間一般で言われている「終活」とはまったく違うものであると感じていた。

「どうしたらご主人のように準備ができるのか?」

「どこから準備を始めたらいいか?」

そう聞かれるたびに、うまく答えられなかった。夫は、まもなくこの世の人生が閉じられる、その「終わりの準備」をしようとしていたわけではなく、あくまでもいつもと変わりなく、この世を生きていただけだから。

本稿では、このことも記してみたいと思う。

「死」だけが特別なものになっている

世間一般で言われている「終活」と夫のそれとのもっとも大きな違いは、自分の死に方を選んだこと、これに尽きると思う。「死に方」という言葉がキツイのであれば、「死ぬまでの生き方」という言い方をしてもいいかもしれない。

仕事は可能な限り最後まで続ける。自宅で私と過ごしながら死ぬ。余計な延命治療は不要。端的に言えば、夫の希望はこの3つだった。そしてその3つを、何度も、わかりやすく、周囲に伝え続けた。だから、医療者も含め、周囲は迷うことがなかった。さらにそれは、夫の「生き方」であることも、周囲は深く理解していくことになったのだ。

死の前後には、主に医療と宗教がある。宗教については、病院で亡くなった後に火葬場に直行する「直葬」も増えつつあるようで、その存在感は薄れつつあるのかもしれないが、少なくとも医療については、病院に一切かからずに死ぬという人はほとんどいないだろう。切っても切れない関係にある。

でも、よく考えてほしい。医者や看護師とは、病気になってから付き合いがスタートする。つまり彼らは、健康な時の私たちをほとんど知らない。どんな仕事をし、どんな人間関係があり、どんな悩みや人生哲学があった、これまで生きてきたのか。もちろん、問診などでそれらを聞くこと努力してくれるが、むしろ受診するこちらの方が、体調の悪い中、まして死の床にあるのなら、改めて自分の生き方を振り返る余裕などなかなか持てない。

家族や親しい友人知人以外の第三者で、死にゆく人の周囲にいる人は、こうした医療者や、あとは福祉関係者だけだろう。いずれも、病気になるってから、あるいは福祉サービスが必要になってから付き合いがスタートした人たちばかり。加えて、家族や親しい友人知人は、死にゆく人との関係が深い故に、また別の苦しさを抱えている。つまり、死の間際になればなるほど、誰も、その人の「生き方」に目を向ける余裕がなくなってくるのだ。

だから、余計に死が特別なものになっていってしまう。本当は、生きて

きた延長線上に死があるのにも関わらず、それだけが特殊なものとして扱われてしまう。酷い場合には、死にゆく人をそっこのけにして、周囲が「その人の死」に向けてとどんどん先に進んでしまう。

私が従来の「終活」に違和感を感じるのは、まさにこれが理由だ。

生きることと同様に、
自分にしかできないこと

葬儀や墓、相続などの準備、これらも必要だろう。でも、私が違和感を感じるのは、死ぬことに真剣に向き合わずして、それだけを準備しようとするからだ。生き方が無視され、死だけが切り取られていることに加えて、それに付随する事柄だけが一人歩きしている。

厳しいことを書いてしまえば、それは「終わりの準備」ですらない。自分がどのように死にたいか、死ぬまでをどのようにして生きたいかを真剣に考えること。これこそが、本物の「終活」であると言いたいと思う。

私は今、月に一度の割合で、死についてのワークショップを開いている。講師を立て、主に医学的・生物学的

な知識の提供を行い、人間が死ぬとは一体どういふことなのかを解説している。なぜなら、本物の「終活」には必要な情報だと考えるからだ。

しかし、告知の仕方も悪いとは思いますが、このワークショップに参加する人は少ない。死そのものを直接的に扱うため、怖じ気づく人が多いようだ。

何の怖れも感じず参加できるのは、死別経験者だけと言ってもいいかもしれない。彼らは、自分の大切な人の死に際して、人体にどんなことが起こったのか、客観的な情報を得ることで、大切な人の死にまた別の視点を持ち、納得していく。そして、自分の死について、真剣に考え始める。

あるいは、死にたいほど生きるのが辛い人も、時々このワークショップに参加する。そして、やはり死に関する別の見方を得て、逆に生きるエネルギーが湧いてきたと言って帰っていく。

死んで、生き返ってきた人はいない。体験者がいないから、証明ができない。未知の世界だから、知らないから、余計に怖い。でも、避けていたら、死はあまりにも唐突だと感じるだろう。しかも、こころりと簡単に死ねるわけでもない。

葬儀や墓の準備ではなく、その前

にある「死ぬまでの生き方」「死に方」を決めるのは、生きることと同じく、自分にしかできないことだ。そしてそれは、葬儀や墓などの自分の死後の準備よりもっと難しい。「自分の死」について、大切な人たちが迷うことのないように道をつけることでもある。自分の希望、こうしたいという意思が明確であればあるほど、自分の死後、大切な人に余計な苦しみを与えずに済むということ、伝えたい。

「死」の捉え方を変えたら、今の「生」は必ず変わる

遺言はもちろん、通夜も葬儀もお墓も、会葬礼状も、さらには死装束や遺影まで。どうして亡き夫は自分で決め、仕切ることができたのか。

その理由は実に単純で、夫にとってこうしたことはもっとも得意であり、「したいこと」だったから。若い頃から、「冠婚葬祭には金子」と呼ばれる人間をめざし、その付き合いを大事にしてきた。夫の先輩夫人などは「あなたが先に死んでしまつて、主人のお葬式は誰が仕切ってくれるの」と泣いたほどだ。

そうした夫の性格や生き方を知っているからこそ、夫がいわば嬉々として自分の死後の準備をして

いる姿を見ても、私には違和感がなかった。それは、夫の「生」そのものだったから。

だから、従来の「終活」については、正直、私にはそんなに難しいことに感じられない。もっとも私の場合、もしも余命宣告を受けられる病気で死ぬことになれば、それこそ在宅で終末期医療を受けるところから通夜、葬儀、お墓の中までの道はすべて、そんな夫の手によって用意されているのだが。

夫が私に残してくれた最大のことは、「死ぬ」とは一体どういうことなのか、あるいは死とは何なのかを教えてくれたこと。誰も知らない、でも全員が100%経験する「死ぬ」ということについて、真剣に向き合うことで見えてくるもの、これこそがこの世でもっとも大切なものであり、自分の力になることを教えてくれた。

死を忌み嫌うのではなく、もっと積極的に捉えられたら、今の「生」は必ず変わってくるはずだ。例えば5代になつたら、一度、真剣に「死」について学び、自分の死と真正面から向き合つて、「死に方」の希望を言葉にしてみる。これが、超高齢社会の日本で生きる、私たち大人の作法になればいいと思つている。

金子稚子(かねこ・わかこ)

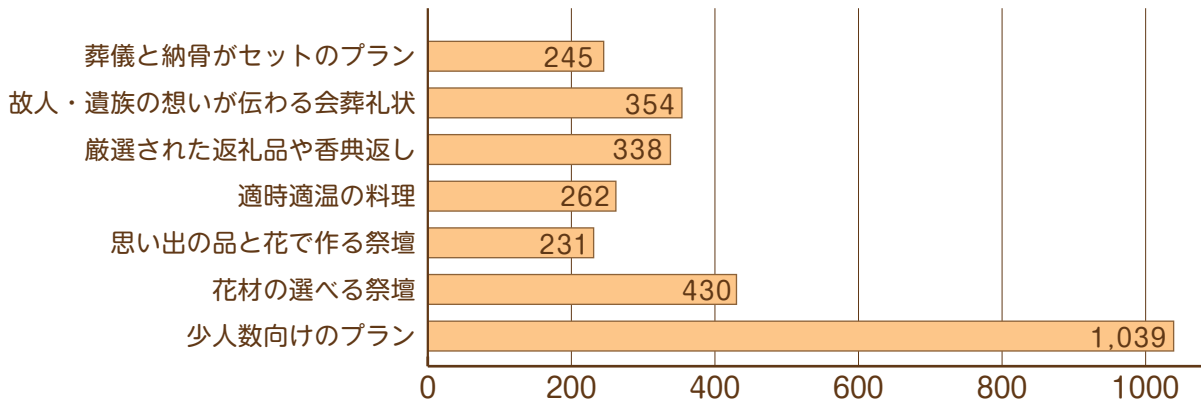
アクティブ・エンディングコンサルタント。株式会社LTN代表取締役。夫は、2012年10月に亡くなった流通ジャーナリストの金子哲雄。雑誌・書籍の編集者や広告制作ディレクターとしての経験を生かし、誰もが必ずいつかは迎える「その時」のために、情報提供と心のサポートを行う。当事者の話でありながら、単なる体験談にとどまらない終末期から臨終、さらに死後のことまでをも分析的に捉えた冷静な語り口は、医療関係者、宗教関係者からも高い評価を得て、各学会や研修会でも講師として登壇している。また、多死社会を前に、人々の死の捉え直しにも力を入れ、真の「終活」、すなわちアクティブ・エンディングを提唱している。著書に『死後のプロデュース』(PHP新書)、『金子哲雄の妻の生き方～夫を看取った500日～』(小学館文庫)。一般社団法人日本医療コーディネーター協会顧問。医療法人社団ユメイン野崎クリニック顧問。ライフ・ターミナル・ネットワーク代表(<http://www.ltn288.net>)



お客様アンケート 回答お礼

前号の東京福社会だより発送の際、アンケートを同封させていただきましたが、26年9月現在、1,719名ものお客様にご返答をいただいております。貴重なご意見を賜り、心より感謝申し上げます、ご意見は今後の改善に活かしてまいります。

《葬儀についてのご希望》

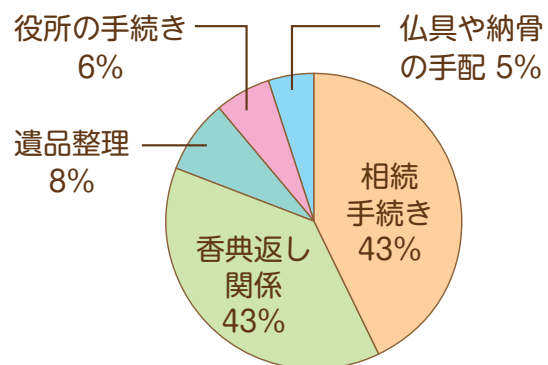


葬儀の希望形式や重視する点で、「少人数向けプラン」を他の項目と組み合わせて回答される方が多くいらっしゃいました。

東京福社会では、直営斎場だけでなく様々な式場で家族葬を承っております。またホームページには家族葬に対応した「自動お見積り機能」もございますので、是非ご利用ください。事前相談(お見積り)も承っております。この他、音楽葬にご興味のある方もおられました。当会では生演奏のオプションサービスの他、お好きだった音楽を流す等の演出も可能ですので、お気軽にお問い合わせください。

《葬儀後大変だったこと》

葬儀後にサポートしてほしいこと、また苦労された点としては、香典返しの手配と相続等手続き関係が多く挙げられていました。福社会でも百貨店や相続専門の老舗税理士事務所の紹介をさせていただいておりますが、更に必要とされるサービスの実現を目指してまいります。

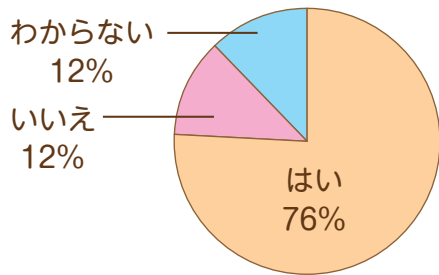


葬儀について (葬儀への希望・葬儀後のサポートへの要望、大変だったこと)

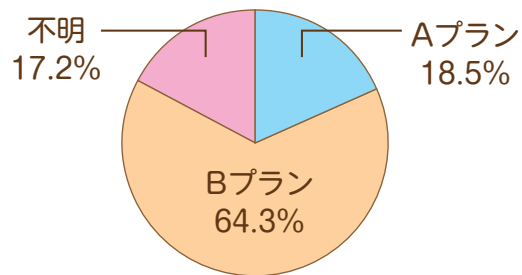
担当者からの コメント

今回のアンケートでは、過去にご葬儀をご依頼いただいた皆様へ、当会への感謝とお礼の言葉を多くいただき、職員の大きな励みとなりました。一方で、皆様への情報発信が不足がちのご指摘をいただきました。皆様の想いを大切にする姿勢はそのままに、より安心してご満足いただけるよう、「東京福社会だより【響】」やホームページ等を通じ、必要な情報をお届けできるよう努めてまいります。

《会友制度に加入していますか》



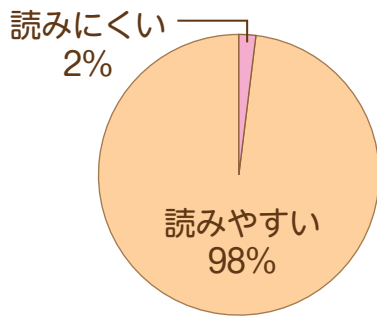
《加入プランはABどちらですか》



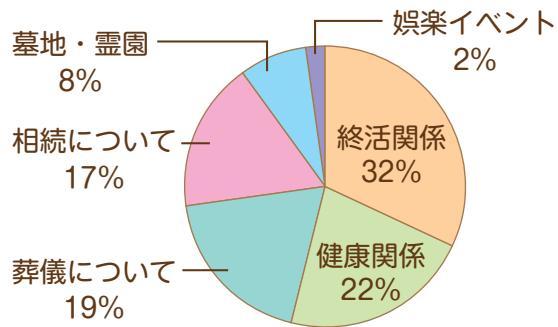
皆様にご好評をいただいている会友制度ですが、「加入しているかどうか不明」「加入していると思うがAとBどちらか不明」という方がいらっしゃいました。

また、大切な方を亡くされた方の心の癒しになればと、平成19年から開催している「わの会」につきましても、「わの会を知らない」「意図がわからない」という回答が多く寄せられました。当会の情報提供不足であったと真摯に受け止め、定期的にお伝えするなどの改善策を取ってまいります。

《「響」読みやすさについて》



《当会のセミナー・イベント内容への希望》



多くの皆様に読みやすいとの回答をいただきましたが、同時に文字が小さいとのご指摘もありました。また内容につきましては、葬儀についての情報、特に具体的な例を知りたいとお声をいただいております。ご意見を真摯に受け止め、今後の紙面づくりに反映してまいります。当会のイベント内容につきましては、終活や葬儀に関する内容の他、健康関係についても多くご希望をいただきました。こちらは、今後展示相談会やイベント等に取り入れたいと思います。

読者の
皆様の
作品の

S.K
(練馬区在住)

桃割結いし六十世年
想出過ぎし昭和の頃
平成をあらたかに祈る思い

新年を神酒供えて

祈りけり

古えの洋髪浮ぶ

雪の郷

平成26年度

物故者慰霊法要 御礼と報告

去る10月23日に練馬区の江古田斎場と、11月10日には国立市のホール多摩国立におきまして、聖恩山霊園納骨物故者永代慰霊法要を執り行いました。

聖恩山霊園堀内是長導師の読経のもと、各福祉事務所と各施設の皆様にご参列いただき、そして当会からも理事長を始め役員、職員が参列いたしました。

江古田斎場は、東京都福祉保健局次長の
砥出 欣典様、ホール多摩国立では、東京都
福祉保健局生活福祉部保護課長の新内 康丈様
に丁重な御挨拶を賜りました。

慰霊法要の後にはご参列いただいた多くの
方々に、納骨堂及び霊安室などの設備を見学
していただき様々なご質問をいただき、当会
の事業へのご理解を一層深めていただけたと
思います。

参列された方々の故人様をお送りされた思
いを感じられ、ご案内をさせていただいた私
共も改めて気の引き締まる思いでありました。
各福祉事務所、各施設の皆様より託された御
霊を、心を込めてお守りしていく所存でござ
います。

ご関係の皆様におかれましては、ご多忙と
は存じますが、是非とも年に一度の法要にご
参列賜りますよう心よりお願い申し上げます。

最後となりますが、ご参列いただきました
皆様方には、この場をお借りいたしまして心
より御礼申し上げます。

東京都福祉保健局
砥出 欣典 次長



東京福祉会
原山 陽一 理事長



ホームページリニューアルのお知らせ

<http://www.fukushikai.com>

東京福祉会では、ご利用いただく皆様に「わかりやすい」「使いやすい」「親しみやすい」をコンセプトに、平成26年11月1日にホームページをリニューアル致しました。

当会の情報（事業案内や行事等）をより詳しく、式場検索やQ&A、自動見積機能などを使いやすくいたしました。また、スマートフォンに対応したサイトも完備しております。

今後、当会の情報を随時更新し、ご利用いただく皆様に必要な情報を発信してまいります。今後ともよろしくお願いたします。



パソコン画面▲

スマートフォン画面▶

エッセイ集完成のお知らせ

当会では昭和58年7月より延べ93号（平成26年9月現在）の会報誌を発行しておりますが、中でも各界の著名な方々にお寄せいただいているエッセイは、毎号大変ご好評をいただいております。

このたび95周年を記念し、これらのエッセイ177作品の中から「老い」「介護」「葬儀」「生きがい」をテーマに15作品を選び、エッセイ集として編集・発行させていただきました。

タイトル「響の縁」には、福祉会だよりを通じて繋がった皆様とのお縁を、末永くつないでいきたいという私共の思いが込められています。ご希望の方には無料でお届けいたしますので、是非ご一読いただき、感想などお寄せいただければ幸いです。



【執筆者一覧】（敬称略）
花山勝友 無着成恭 三橋尚伸
小田島雄志 桐谷エリザベス 橋幸夫
坂東真理子 中村メイコ 玄侑宗久
松本光正 童門冬二 岡野守也

【申し込み方法】

- ・同封の申し込みはがきに必要な事項を記入のうえ、郵送にてお申し込みください。
- ・メールでのお申し込みをご希望の場合は、
①住所②氏名③電話番号④希望冊数（一人最大3冊まで）を明記のうえ、info@fukushikai.comまでご連絡ください。

ご希望の方は
同封のハガキ又はメールで
お申し込みください。

■お問合せはこちらまで

電話 **03-3823-8026**
東京福祉会 渉外部
(E-mail) info@fukushikai.com

東京福祉会 検索
<http://www.fukushikai.com>



「東京福祉会だより（響）」は再生紙を使用しています。